

地域福祉文学大賞

大賞

さくらの夏休み

竹田 有友己

令和5年度に全国公募した「地域福祉文学大賞」の受賞作品です。
作品の著作権は、社会福祉法人新潟市社会福祉協議会にあります。

新潟市西区社会福祉協議会

「あなた、誰？」

声が出て、さくらは振り返った。

庭の隅で、中年の女性がこちらを見ている。

「あなたこそ、誰ですか」

聞き返すと、女性はかさかさと雑草を踏みながら近付いてきた。

「もしかして、雅江さんの、お孫さん？」

「そうですけど」

首から下げた名札には、「北田」と大きな文字で名字が記されていた。

戸惑うさくらを尻目に、彼女は親しげな表情を見せる。

「ごめんなさい、びっくりさせて。どうかびっくりしたわ。梅の木の下に女の子がいるんだもの。柳の下なら幽霊ね」

冗談のつもりだろうが、笑えなかった。それより泣いているところを見られたいかもしれない。彼女は気遣うような口調になった。

「さくらさん、よね。生前雅江さんがお話しされました。ご葬儀の時お見かけしたんだけど、ご挨拶できなくてごめんなさい。……今日はお墓参り？」

このお婆さん、さつきから一方的にしゃべってる……。

そんな心の声が聞こえたのか、彼女は慌ててカードケースから名刺を抜き出した。

「私、新潟市若葉区社会福祉協議会の北田由佳です。地域のケースワーカーもしているの」

しかし、いまいち何をしている人か、わからない。

さくらの疑問をスルーするかのよう、北田は視線を逸らした。

「梅の実を見にきたんです。生前雅江さんに頼まれていて……」

「え？」

「雅江さんの梅干し、とても評判だったのよ」

北田の視線を追うと、初夏の日差しを受けた青い梅の実が、たわわに実っていた。

聞けば祖母は、毎年この梅で梅干しを作っていたそう。しかし体調が悪化し、見舞いに来た北田に、梅の実の収穫を頼んだという。

「だから私は梅の番人ってわけ。完熟したかどうか、時々覗きにきてるの。そしたらお孫さんがいるんだもの、びっくりしたわ」

思わず「すみません」と謝った。

人の家の庭に勝手に入ってきたのは、おばさんの方なのに……。
理不尽に感じていると、北田が唐突に切り出した。

「今日は木曜日よね。サロンに来てみない？」

「サロン？」

「そう。雅江さんたちが立ち上げたボランティアグループが、サロンを開いているの。この後予定がなければお連れするわ。時間は大丈夫？」

北田はさくらの返事を待たず、手提げバックの中から、車の鍵を取り出した。

今朝、いつもと同じ時間に家を出て、決まった時刻の通勤電車に乗った。

新橋駅で地下鉄に乗り換えようとした時、突然スイッチが切れたみたい動けなくなってしまった。

会社の電話番号を表示させ、通話ボタンをタップした。

——今日はお休みします。

そんな簡単なひと言が、ずっと言えずにいたなんて……。

人混みに紛れて歩きながら、ふと、祖母の家へ行ってみよう、と思い立った。

幼い頃、母を病気で亡くしたさくらは、夏休みの間、父の実家である、新潟の祖母の家へ預けられていた。しかし中学生になると、次第に足が向かなくなってしまった。

あれからおよそ十年が経ち、子どもの頃の夏休みが、無性に恋しく懐かしい。

東京駅へ向かい、上越新幹線に飛び乗った。新潟駅で降り、タクシーでここまでやって来ると、わけもなく涙がこぼれた。

その時さくらは気づいた。

自分はずっと、こんな風に泣きたかったのではないだろうか——。

それなのに、初対面のおばさんの運転する車に乗っているなんて、どうかしている。

北田はハンドルを握りながら、とりとめのない世間話を繰り返す。さくらは曖昧に相槌を打ちながら、窓の外に広がる田園風景をぼんやり眺めていた。

十分ほど走ると、サロンが開かれている町内会館に到着した。

入口の引き戸をガラスと開けると、長机をくつつけた島の周りに、十人ほどの高齢者が座っていた。おしゃべりをしたり、お菓子をつまんだり、皆くつろいだ様子だ。男性たちは将棋や囲碁盤に向き合っていた。

「お、北田さん」

「今日はどうしたの？」

高齢者たちの表情を見ると、北田が皆から歓迎されていることがわかる。

「あら、おじゃまでした？」

北田は冗談を言いながら、奥にいる女性たちに近付いていった。

「さつき、梅を見てきたんですね、偶然雅江さんのお孫さんにお会いして、お連れしました」

「ええっ」

女性たちが、揃って目を大きく見開き、さくらを見る。北田が話していたボランティアグループ、『山椒の会』のメンバーのようだ。

「ちづさん、きみこさん、みさえさんです」

紹介されたが、皆雰囲気似ていて、区別がつかなかった。

サロンは独居高齢者の居場所や見守り、仲間づくりが目的で、社会福祉協議会、いわゆる「社協」の『まちづくり助成金』で運営していると北田は説明した。

「今は町会ごとにサロンがあるの。それぞれ特徴があって、皆さん楽しそうなのよ」

テーブルの上には、折り紙や塗り絵、クロスワードパズルなどが置かれていた。

「雅江さんも一人暮らしが長かったですよ。だから自分も参加できる場所を作りましたかったみたい」

社協で開催されているサロンの立ち上げ説明会に参加し、とても積極的だったと振り返る。初めて知る祖母の姿だった。

花柄のブラウスを着たきみこさんも、身振り手振りで苦労話を披露した。

「北田さんには世話になったの。助成金の申請とか報告なんて、私たちがじゃからねかったもの」

「私はお手伝いをしただけです。今やきみこさんはパソコンも覚えて、こんな案内まで作れるようになったじゃないですか」

北田がさくらにチラシを見せてくれた。

『サロン山椒の会 若葉町内会館で毎週木曜日開催中！
みんなで楽しくおしゃべりしましょう！』

縦横比がアンバランスな、コーヒーカップのイラストが微笑ましかった。
「それにしても、雅江さんのお孫さんに会えるなんてね」

感慨深いなのは、水色のシャツを着たちづさんだ。茶色い小さな壺の蓋を開け、さくらに爪楊枝を手渡す。

「雅江さんが去年漬けた梅干し。食べたことあつろ？」

「いいえ……」

すると、ちづさんが驚いた顔をした。

「東京の息子んところに、毎年送ってるって話してたけどなあ」

しかし父とは、ずっとすれ違いの生活だ。食事を一緒に取ることなどめつたにない。それに、さくらは梅干しが苦手だった。

断るわけにもいかず、楊枝で刺した梅干しを口の中に入れてみた。すると、思いのほか酸っぱくないし、食べやすい。初めて口にするのに、懐かしい味でした。

「んまいでしょ？」

素直に頷くと、なぜがちづさんが得意げな顔になった。

「今年は私たちで、この梅干しを再現してえんだども、いいかな」

いいものにも、さくらに拒否する権利はない。

「雅江さんの味には、ならんば思うども、これも供養だすけ」

そう呟くと、壺の蓋をそっと閉めた。

「ところで、今日はどこかに泊るの？」

北田に聞かれて、さくらは咄嗟に嘘をついた。

「いえ、お墓参りのついでに、祖母の家に立ち寄っただけですから」

「じゃあ駅まで送っていくわね」

「でも、北田さん、お忙しいんじゃ……」

「そのくらいの時間はあるわよ。でもその前にちよつと事務所に戻ってもいい？ 見せたいものがあるから」

さくらはまたしても、北田のペースに振り回されることになった。

若葉区社協の事務所は、町内会館から車で少し走った大通り沿いの福祉複合ビルの二階にあった。さして広くないフロアには三人の男性職員がいて、静かにノートパソコンに向き合っていた。

北田のデスクの上には、不在中に掛かってきた電話の伝言メモが鱗のように貼りついている。彼女が多くの人に必要とされている証拠だ。

さくらは昨日までの自分を遠く感じた。人とのつながりも、仕事の進捗も、すべてPCの中で完結する日常。誰とも口をきくことなく、退社時間になってしまうことも多々あった。

「そのソファに座って少し待って。電話一本掛けちゃうから」

北田は忙しく言うのと、さくらの前に新聞や広報紙、冊子の束をどさっと置いた。埃っぽくて、思わずくしゃみが出た。

「この中に雅江さんの記事があるわ。報告書類にも写真があるはず」

北田はそう告げ、再び自席に戻り、受話器を取った。

祖母が新聞記事になるような活躍をしていたとは信じがたい。さくらは半信半疑でページをめくった。するとそこには、祖母の生き生きした姿が写っていた。

マイクを持って、なにやら発表をしているかしまった姿。大きな胸花をつけて、福祉功労者の感謝状を受け取る晴れやかな笑顔――。

『山椒の会 代表 市川雅江さん』

キャプションが付いた写真入りの記事もあった。

目が点になる、というのは、こういう状況をいうのだろうか。

そうだ、父に教えてあげよう……。

「写真を撮っていいですか？」

北田に聞くと、

「いいわよ、お父さんにも見せてあげて」

と、別の伝言メモを剥がして、受話器を持ち上げた。

一本電話をするだけだと話していたのに、忙しい人だ。

再び記事に目を通していると、窓口の向こうから日に焼けたおじさんが顔を覗かせた。

「お、いたいた。北田さん」

「あ、会長、ちょっと待ってて」

しかし男性は構わずしゃべり出す。

「野菜、持ってきた。今年はけっこう、できが良うてき——」

「さくらさん、お願い」

「なんで？　と思っただが、言える立場ではない。さくらは立ち上がり、窓口に
出た。」

「あんた新しい職員さん？」

「いえ、私は」

「雅江さんのお孫さんですよ。東京からいらしてるの」

北田が送話口を塞ぎながら、誤解を解いてくれた。

「へえ、雅江さんのお孫さんか。今年をあの梅干しが食べられねえと思うと、
寂しいもんだよ」

「ここにも祖母の作る梅干しのファンがいたとは、驚きだ。」

会長が持参した箱の中には、カリフラワーのような野菜が入っていた。茎が
長い「茎カリフラワー」という野菜らしい。

「スーパーなんかじゃ、『カリフロレ』ってシャレた名前つけて売ってるよ」
「初めて見ました」

「そう？　ここら辺の名産なんだよ。持って帰りな。炒め物でも、茹でてマヨ
ネーズかけて食べても、んまいすけ」

電話を終えた北田が窓口に来て、箱を覗き込む。

「会長は野菜づくりの名人なの。さくらさんも頂くといいわ」
そう言うと、ビニール袋に分け入れてくれた。

「ところで志村のあんちゃんは、まだ休んでんの？」

会長の視線の先には、きれいに片付いたデスクがあった。イスの背に「若葉
区社協」とプリントされた紺色のジャンパーが掛かったままだ。

入職二年目の志村幹人という職員が、ゴールドデンウイーク明けから欠勤して
いるという。

「忙しい思いをさせちゃったかしら」

「北田さんのせいでねえだろ。そのうちケロッと出てくるよ」
「だといいですけど」

「いっほど単純なものじゃないかもしれないのに、この人たちが口にすると、
そんな気がするから不思議だった。」

ひと仕事終えた北田の運転で、さくらは駅へ向かった。

今日会ったばかりの人なのに、まるで久しぶりに再会した親戚みたいな感覚になる。

祖母の家で懐かしい空気を吸ったら帰ろうと思っていたが、北田と遭遇したことで、予期せぬ事態になってしまった。

おばあちゃんが会わせてくれたの？ まさかね……。

心の中で呟くと、膝の上で、カリフロールの入ったビニール袋がカサカサと音を立てた。

効率を求める職場に疲れたただなんて、言う間もなかった。北田は一人で何役もの仕事を担っているのだ。

「社協の人って、忙しいんですね」

何気なく問いかけると、北田は前を向いたままハンドルを握り直した。

「そう？ みんながみんな、そうじゃないと思うけど、なんだか色々と気になるっちゃうタチだから——」

「立派ですね。私だったら、なんでこんなことしなきゃいけないの。私の仕事じゃないよね、ってキレそう」

すると北田が派手に笑った。

「さくらさんは正直ね。もしかして、幹人君もそんな気持ちになったのかしら」

「休んでる職員さんのことですか？」

「そう。優しい子だね、断れない性分なの。だから地域の人に重宝がられて……。私もよく見てあげればよかったんだけど」

けれど、誰が注意深く見ていようと、おんなじだ。負の感情は表面に出ない場所で増殖し、ある日突然世界が暗転してしまう。

「私たちの仕事って、マニュアルがあるようでないの。強いていえば、縁の下の力持ち。決して目立たないけど、誰かと誰かを繋ぐ見えない接着剤みたいな役割なのかもね」

わかったような、わからないような……。

「……大変ですね」

思わず呟くと、

「あら、そんなに難しいことじゃないわ」と、北田が言い足した。

「要するに……、人が好き、この町が好き、って気持ちがあれば大丈夫。だって一人の人間にできることなんて、そんなに多くないもの。私だけじゃ何もできない。仲間あつての仕事だから」

北田はチラとさくらを見て、「ねっ」と微笑んだ。

「またいつでも来ればいいわ。さくらさんなら大歓迎よ」

何もかも見通しているようなその笑顔に、さくらはドキリとした。

東京の自宅へ戻ると、父が一人で夕食を取っていた。

「遅かったな、残業か」

「そんなもん」

誤魔化し自室へ行こうとした時、食卓に置かれた透明な小瓶が視界に入っ
た。

「その梅干しって……」

「これか？ 前におふくろが漬けて送ってくれたものだけど……」

容器の底には、潰れかけた梅干しが数粒だけ残っていた。

「これで最後になったな」

父が、梅干しの種を名残惜しそうに口の中で転がしながら、呟く。

その時さくらの中にある、熱い塊のようなものが、ごろつと動いた。

「私、おばあちゃんちで、梅干し、作ろうかな」

父が目を大きく見開き、さくらを見た。皿にコツンと種を吐き出す。

「仕事はどうするんだ？」

「辞める」

「そんな、簡単に……」

今朝、上越新幹線に飛び乗った時から、心は決まっていたのかも知れない。

「暫くおばあちゃんの家に住む。いいでしょ？」

「向こうに知り合いなんていないだろ。それに梅干しのために仕事を辞めるなんて」

「知り合いはいるよ」

スマホに保存した祖母の写真を見せると、父は、さらに驚いた顔で画面をスクロールさせた。言葉を失っているようだ。

「おばあちゃんには仲間がいっぱいいたんだよ。一人じゃなかった」

カリフローレを袋から取り出し、父に見せた。益々怪訝そうな表情になる。

「カリフローレは、炒めても茹でてでも美味しいんだって。明日作るよ」
さくらの脳裏に、今日出会った人たちの顔が思い浮かんだ。また会いたいと、素直に思った。

翌日北田に着歴を残すと、すぐに電話が掛かってきた。

『ごめんなさいね。出先ですぐに出られなくて』

「いえ、お忙しいのにすみません。昨日はありがとうございました」

多忙な北田に世間話をする時間はないだろう。さくらは自身の決意を述べた。

しかしなんだか雲行きが怪しい。喜んでもらえると自惚れていた自分がバカみたいだ。暫しの沈黙が長く感じた。

『……さくらさん。嫌になって逃げてきました、的な気持ちじゃ、どこへ行っても一緒よ』

「え……」

『どこもおんなじ。渡る世間は鬼ばかりよ』

ドラマのタイトルみたいなのセリフに、さくらはくすつと笑ってしまった。

『真面目な話、今まで、のんびりした田舎暮らしを求めて都会から移住してくる若い人もいたけど、いつの間にかいなくなってしまうの。もしくは孤立して近所付き合いを拒むようになるのか……』

きつと北田はさくらの覚悟が聞きたいのだ。

「私は、のんびりした田舎暮らしをするために行くわけじゃありません」

きつぱりと否定した。

「父に、梅干しを作ってあげたいんです。みなさんに教えてもらいながら、祖母の梅干しを再現してみたいんです。そんな理由じゃだめですか？」

それに、たとえ鬼がいたとしても、北田がいれば、ちつとも怖くない。

電話の向こうで、北田が笑い声をあげた。

『わかったわ。来る日が決まったら連絡してちょうだい。住めるようにしておくから』

「は？」

『ちづさんが、雅江さんから合鍵を預かっているみたい。家の掃除をしておくわね。それとライフラインも……』

北田は不動産業者のようにてきぱきと段取りをした。余計な仕事を作ってしまったようで、申し訳ない。

『あら、私がやるんじゃないわよ。餅は餅屋。自慢じゃないけど、私は家事全般の能力が、ゼロの人間だから』

スーパーウーマンのような人にも弱点があったとは驚きだ。いや安心した。通話を切ると、心はもう、祖母の家に飛んでいた。

決断してからの行動は早かった。

会社に辞表を提出し、仕事の目途が付いたところで新潟へ向かった。

「おばあちゃんと同じ味にはならないと思うけど、梅干しができたら送るか
ら」

父は、「ありがとう」と、送り出してくれた。

そんな言葉を聞いたのは久しぶりで、さくらは胸がいっぱいになった。

大きなスーツケースと一緒にタクシーを降りると、祖母の家の庭には軽トラ
ックが一台停まっていた。

開け放した玄関扉の中から、賑やかな女性の声がする。醤油の香ばしい匂い
も漂っていた。

「すみません」

呼びかけたさくらの背後で、「おう！」と声がした。数日前、社協の事務所
でカリフローレをもらった、どこかの町内会の会長だ。庭掃除や家の修繕を請
け負ってくれたらしい。

「風呂場も直しといた」

「あの、修理代を」

「いや、たいしたことねえから」

「でも」

「雅江さんには世話になったすけ、いいんだよ」

「そうなんですか？」

北田の話していた「餅は餅屋」というのはこのことだろうか。なんだか頼も
しい。

会長の野太い声に、エプロン姿の女性たちが台所から出てきた。

ちづさん、きみこさん、みさえさんの面々だが、あの時と着衣が違うので、再び見分けがつかなくなってしまった。

「勝手に上がり込んでしもうて、ごめんなさいね」

「食器もお鍋も洗うて、とりあえず、必要そうなものは買っておいたすけ」

「使つてない小さい冷蔵庫があつたんで、持ってきた」

「布団も干しといた」

お札を言う隙もないくらい、三人は矢継ぎ早に報告する。

ついでと言いながら、夕飯の支度までしているようだ。しかし量が多い。

「今日は歓迎会。北田さんも誘つてつから、いいでしょ？」

勝手に決められ、さくらは呆気に取られていた。とはいえこれから三人に梅干しづくりを習わなければならぬ身だ。

「もちろんです」

敢えて明るく、そう答えた。

すると、作業服姿の若い男性が顔を覗かせた。

「ゴミ、片づけといたよ。俺はもう帰つていい？」

会長が振り返り、彼を手招きする。

「紹介するよ。志村幹人君。力仕事の手伝いで来てもらうた」

「そうなんですか……。ありがとうございます」

お札を言いながらも、さくらはどこかで聞いた名前だと思い返した。

志村幹人……。確かゴールデンウイーク明けから休んでいる社協職員だ。

「志村君も今日の歓迎会に呼んでもらえばいいよ。この家、懐かしいだろ？」

「来たことがあるんですか？」

「子どもの頃ね。あんた、さくらさんでしょ？」

いきなり距離を詰められ、さくらは戸惑う。

「そうだけど、なんで、私のことを？」

「近くにじいさんが住んでて、よく遊びにきてたんだ。夏休みになると、いつもあんたがいたから——」

「えっ、知らなかった」

「当然だよ。声かけたことなんかもないもん。でも雅江さんには世話になったんだ。じいさんに、おかずやご飯を作つて持つてきてくれてたみたいで——」

「志村君は年寄り思いなんだよ。さくらさん、あんたも優しいな。雅江さんの遺した家に住むつていうんだすけ」

会長に褒められて居心地が悪くなったさくらは、梅を見るため裏庭に回った。

先日、十余年ぶりにこの庭を見た時は雑草だらけだったが、今はそれもきれいに刈られ、箒で掃いた跡がある。梅の実は熟して黄色くなり、甘い匂いを放っていた。

「収穫はあさってくらいかな」

振り返ると、幹人が梅の木を見上げていた。

「わかるの？」

「だって、俺、手伝ったことがあるから」

「社協の職員として？」

「社協にそんな仕事はないよ」

「でも北田さんは……」

「あの人はなんでも屋さん。なんでもできる、やっちゃう人なの」

「家事はできないって言ってたよ」

すると幹人が小さく笑った。

「確かにそうかも。でも、北田さんの仕事は、誰にも真似できない」

「できないなら、無理にやらなくていいんじゃない？ できる人がやればいいだけのことだから。それが仕事だから」

自分に言い聞かせるように言うと、幹人が少し驚いた顔をして、「そうだね」と呟いた。

「ところで、幹人君は今年も梅の収穫を手伝ってくれるんでしょう？」

「協力するよ。雅江さんと北田さんとの約束だったみたいだし」

「なんか、おばあちゃんが繋いでくれた縁って、すごいね」

「そうだね。でも、ただ繋いだけじゃ、すぐに切れてしまう。それを大事にしてくれる人がいなきゃ」

さくらはドキリとした。年下なのに、幹人が大人びて見えた。

翌日、昼過ぎに幹人が車で迎えにきた。北田から、さくらを連れてくるよう言われたらしい。昨夜は歓迎会に顔を出せなくて悪かったと話していたそうだ。また誰かの為に奔走していたのかもしれない。

幹人は昨日とは打って変わって、白いシャツにパンツ姿だ。首から名札も下げている。聞けば、職場復帰したと、恥ずかしそうに答えてくれた。

そういえば昨夜の歓迎会で、幹人は会長に愚痴をこぼしていた。酒の力を借りて本音を聞いてもらい、少しすっきりした様子だった。

関係ないけど、さくらは嬉しく思った。

社協の事務所に着くと、北田は誰かと電話で話していた。

その横顔を懐かしく感じるのはなぜだろう。どことなく亡くなった母に似ているからだろうか。母が年を重ねていれば、きっとこんな風に――。

いや、ちよつと違うか。大いに違う。

そんなことを考える自分がおかしかった。

「なに笑ってるの？」

電話を終えた北田が近付いてきた。

「どうせ昨日は、私の悪口言ってたんでしょ」

「あ、くしゃみ、しました？」

「やっぱり」

「嘘ですよ。それより祖母の家のこと、いろいろありがとうございました」

「お礼を言うのはこっちの方よ。お陰で志村君も帰って来てくれたし」

幹人が照れくさそうに、紺色のジャンパーが掛かった自席のイスに座った。

パソコンを立ち上げると、微かな起動音がして、斜め前にいる男性職員が、眼鏡の奥の目を細めた。

北田がさくらの対面に腰を下ろし、居住まいを直す。

「今日来てもらったのは他でもないの。さくらさん、ここで働かない？」

「は？ 私、仕事を辞めて来たんですよ」

予想外の展開に、さくらは戸惑った。

「だったら好都合じゃない。一日中あの家にいても飽きるでしょう」

幹人が同情の眼差しを向けてきた。

「強引でしょ、この人」

「私なんて、何もできませんよ。コミュニケーションはないし、あ、そうだ、車も持ってません」

「そんなの、これからでいいの。梅の木の下で会ったのも何かのご縁。私は雅江さんが引き逢わせてくれたと思っっているの」

さくらは断る理由が思いつかず、俯いた。

「最初はアルバイトで、どうかしら」

尚も北田が誘うと、幹人が加勢した。

「人手が足りないみたいだよ」

「幹人君が休んでたからでしょ？」

すかさず言い返すと、北田が派手に笑った。

「二人はきつといい相棒になるわ」

さくらは幹人と顔を見合わせ、苦笑いした。

梅を収穫する日は、まるでお祭り騒ぎだった。早朝から会長や幹人がやって来て、勝手知ったる他人の家で、納屋の中から脚立や蓆を運び出していく。

山椒の会の三人は、割烹着姿で戦闘態勢だ。

「おはよう」と家の中に入ってくるなり、仏壇に線香をあげ、手を合わせた。

「雅江さん、約束が果たせそうだよ」

「うまくできるかどうか見守っておくれ」

リンを鳴らすと、天井の高い座敷に、幾重にも残響が広がった。

梅は用途によって収穫する時期が違くと幹人は言う。落果した梅の実で梅干しを作る農家もあるが、祖母は完熟した梅を手でもぎ取り、数日間追熟させてから塩に漬けていたそうだ。

梅の木の下には、既に完熟梅が転がっている。しかしそれは梅干しではなく、ジャムにするので避けておくよう、注意された。

一本の木から収穫した梅の量の量は、予想をはるかに超えていた。

「雅江さんからのプレゼントかもね」

コンテナから溢れんばかりの黄色い梅を見ながら、皆、感慨深げな表情をしていた。

さくらはちづさんから、梅の実の扱い方を教えてもらった。

追熟後、産毛を取るため優しく洗い、ざるに上げて水気を切る。また、梅を漬ける瓶は煮沸消毒し、自然乾燥しておかなければならないそうだ。

「水分が残っていると、カビの原因になるすけね」

瓶の蓋も熱湯にくぐらせるよう、念を押された。

乾いた梅の実のヘタを取り、更にペーパータオルで拭いて瓶に入れ、塩を重ねていく。塩は多いほど保存に適しているが、祖母は十パーセントの塩分で梅の実を漬けていたと、ちづさんが記憶を辿った。

「二週間も待てば、梅から水が出てくるすけ」

実から水分が抜けた頃合いで、梅雨が明ければ天日干しにする。

その間、さくらは幹人と一緒に「わかば子どもまつり」の準備に取りかかった。区が主催する夏休みのイベントだが、若葉区社協もブースを出しているというのだ。出し物は毎年同じらしく、のぼり旗まで作ってあった。

『クイズで知ろう！ みんなの若葉区』

簡単なクイズに答えてもらい、正解した数に合わせて、お玉で駄菓子が掬えるゲームだ。

さくらは準備に奔走した。ショッピングモールで駄菓子を仕入れたり、百円ショップで会場ディスプレイ用の小物を揃えたりと、学生時代の文化祭を思い出し、楽しい気分になっていた。

北田はそんな様子を見て、「若い人がいると助かるわ」と感心しきりだ。少しは誰かの役に立っているようで、さくらは嬉しかった。

梅の天日干しは、天気予報を見ながら行った。夜露に当てながら三昼夜干すと、実が柔らかく仕上がるそうだ。仕事で家を空ける日中は、山椒の会に留守番を頼んだ、夜は予報外の降雨が気になり、まんじりともせず過ごしていた。しかし祖母が見守ってくれていたのか、雨に当たることなく、赤くて柔らかい梅干しに干し上がった。

そんなある日、庭で赤紫蘇の葉を塩もみしていると、車のエンジン音が聞こえてきた。現われたのは、なんと父の乗った青い車だ。

「どうしたの？」

運転席から出てきた父に駆け寄ると、

「自分の実家に帰ってきたのに、どうした、はないだろ？」

と、ゴム手袋をはめたさくらをまじまじと見た。

「すっかり田舎のお嬢さんだな」

「どういう意味？ ていうか、なんで来たの？」

不貞腐れながらも頬が緩む。

「さくらが、ちゃんとやってるか、見にきたんだよ。それに、こいつが必要じゃないかと思って」

父が車を指さした。

「え、貸してくれるの？」

「ぶつけるなよ」

渡された車の鍵は、ほんのり熱を帯びていた。

「でもお父さんはどうするの？」

「東京にいと、車なんか無くてもどうにかなる。それに、必要になったら借りにくるから」

「なんか面倒くさい」

「理由がないと、来れないだろ？」

そんなことを言う人ではなかったのに、たった数週間でどうしたのだろう。さくらは驚いていた。

「今日は泊っていくでしょ？」

「車を取られたのに、追い返すつもりか？」

反論しなくなったが、やめておいた。きっと父も照れくさいのだ。

その夜は、父と夕餉を囲んだ。といっても、ちづさんが作り置きしてくれたおかずを並べただけだけ——。

祖母や母のことを、向かい合ってちゃんと話したのは初めてだった。

さくらは早速、干したばかりの梅干を、父に食べてもらった。

「これから赤紫蘇に漬けるんだけど、このままでもじゅうぶんおいしいの」

父が「いただきます」と手を合わせ、ほんのり赤い実を口に入れた。

どこかの田んぼから、ピピピピと虫の鳴き声がする。

「どうかかな？ おばあちゃんのと違うけど」

「うん、これはこれでありだ。上出来だよ」

「よかった」

父が立ち上がり、薄暗い窓の外を見た。

「この庭は梅だけじゃないんだ。あれが栗の木。柿も小さな青い実がついてるだろ？」

さくらは父の隣で目を凝らした。

「ほんとだ、気づかなかった」

「秋になると、おふくろは栗ご飯を作ってくれた。冬は渋柿を干し柿にしたりして……。すごく旨かったよ。今となれば贅沢だったと思う」

「生きてるうちに言っておきなきゃ。もう遅いよ」

「そうだな」

二人で祖母の写真を見ながら、グラスを掲げた。

「お母さんにも……」

さくらが言うと、父はふっと寂しそうな表情になった。

「おふくろと二人、あっちの世界で仲良くしてるかな」

「大丈夫だよ」

「そうだな。二人共、なんというか……」

「賢いから」

声が揃い、笑い合った。

「……お父さん。私、梅干づくりのミッションが終わっても、ここに住もうかな」

「仕事はどうするんだ。アルバイトをしてるって聞いたけど」

「うん。社協の正職員の試験を受けようと思ってる。じゃないと、北田さんや幹人君にこき使われっぱなしだから」

「なんか嬉しそうだな」

父がにこやかな顔でビールをぐくりと飲んだ。

「……冬は寒いぞ。雪も降るし」

「他人事みたいに言わないですよ。お父さんもちよくちよく来て手伝って。あ、そうだ。畑でも作ろうよ。何植えようか」

「簡単に言うなよ」

開け放した窓から、湿気のない夜風が吹いてきた。

夏が終わっても、その先の季節を、ここで生きていきたい。

いいことばかりじゃないだろう。けれど、頼もしい仲間がいる。

翌日、ペーパードライバー教習を兼ねて、父を駅まで送っていった。

「合格だ。後は来た道を引き返すだけ。明日からは自分で運転して頑張るんだぞ」

「わかった。赤紫蘇の梅干ができたら送るよ」

「ああ、楽しみにしてるよ。みんなにかわいがってもらいなさい」

父とこんなふうにしたのは何年ぶりだろう。いやもしかして、初めてかもしれない。

車窓に映る田園風景が、慣れ親しんだ景色に思えてきた。

——この町で暮らしていこう。

そう決意し、さくらはハンドルを握り直した。

ほのかに父の香りがした。

(了)